

第31回 〈ケア〉を考える会-岡山

■日時 **2017年3月12日(日) 14:00~16:30**

■会場 **川崎医療福祉大学 本館6階6001演習室**

http://www.kawasaki-m.ac.jp/mw/access/index.php/*

※建物の1階(防災センター)から備え付けのスリッパに履き替えてお上がり下さい。

駐車場は、福祉大学の職員・学生駐車場(病院とは道をはさんで北側)が利用できます(1時間100円)。

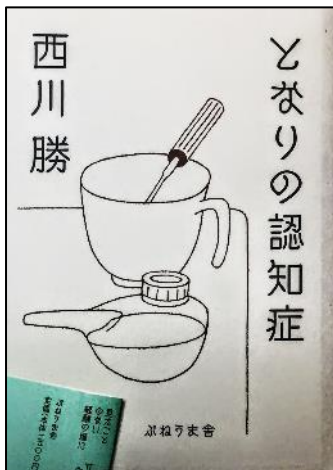
■会費：無料。どなたでも参加できます。本を読んでなくても(持ってなくても)気兼ねなく参加できます。



■読書会

『となりの認知症』(第3・4章、他)

(西川 勝 著/ぷねうま舎)



■呼びかけ人

大賀由花(看護師)、
河合清志(社会福祉士)、
小林真美(看護師)、
清水昭雄(管理栄養士)、
田中順子(作業療法士)、
林道也(社会福祉士)、
平松邦夫(社会福祉士)、
松川絵里(てつがくしゃ)

「認知症」という名前の人なんか、どこにもいません。誰か具体的な顔を持った人が、認知症という苦勞を抱えて生きていただけです。しかし医学の問題や社会の課題として考える際には、病気としての「認知症」と言う枠組みが必要になります。脳神経細胞の変化や要介護度で語られるのは、遠くから見た認知症と呼ばれる一群の人々です。

それでは、近づいてみましょう。目の前にいる認知症の人を、まるごと理解しようとするとき、自分と相手とを重ねあわせるように寄り添うとしたとき、愛情だけでは行き詰まってしまう困難があります。さらに近づけて、認知症を自分の問題として想像したときには、簡単には乗り越えられない不安や恐怖を感じてしまいます。

では、遠すぎもせず近づきもしないのは、いったいどこなのでしょう。

それは「となりに居る」ということだと、僕は考えています。相手と自分とが同じ場に生きるものとしてとなり合わせることが大切です。相手の顔が見えます。自分の顔も相手から見られます。僕が思い出す認知症の人は、みんな顔のある人です。その顔は僕に向けられていました。(p.41-42)



西川 勝

にしかわ・まさる
1957年、大阪生まれ。
臨床哲学者・看護師。哲学
カフェやダンスワークシ
ョップなどの活動にも取
り組む。元大阪大学コミ
ュニケーションデザイ
ン・センター特任教授。著
書に『ためらいの看護』
『一人』のうらに一尾崎
放哉の島へ』などがある。

■問い合わせ：884michiya@gmail.com 090-5366-1497(林)



「〈ケア〉を考える会-岡山」とは……

▼岡山(倉敷)で、〈ケア〉について学び考えています。

〈ケア〉といえば、「看護」「介護」「支援」「世話」などが頭に浮かびます。超高齢社会を生きる私たちにとって、切実な課題の一つです。そして、〈ケア〉は、もっと広く捉えることもできます。たとえば広井良典氏は、ケアを「人と人との間の『関係性』という意味に理解してみたい」と述べ、さらに、個人がコミュニティや自然などとつながっていくような方向でもケアを考えます。「『ケアの哲学』とでもいうようなものが必要」とも言っています。また、鷺田清一氏は「臨床哲学」の重要テーマの一つに「ケア論」を置き、「ケア」の奥深さをさまざまに説いています。それに、「死生観」、「生」と「死」について、リビングウィル、終末期医療も、〈ケア〉を抜きには考えられません。

この会では、〈ケア〉について、身近なところから理念的なものまで、そして、狭い意味から広い意味まで、幅広く深く考えていきます。

▼この会の参加者は、医療・看護・介護・福祉・教育などの現場、または地域や家庭などで〈ケア〉に関わっている方、大学や学校で〈ケア〉の教育・研究に携わる方や学んでいる方、さらに、その他、〈ケア〉に関心や関係のある方などです。〈ケア〉に関わる人たちが学び交流することで、明日からの力を得る〈場〉となることを願います。この会は参加者の“つながり”を大切にします。

※ ホームページ ⇒ <http://okayama-care.jimdo.com/>

